

# 北米日系移民と日本書店

——サンフランシスコを中心に——

日比嘉高

この論考では、北米日系移民たちの創りあげた書物の流通システムに関する考察を試みる。アプローチとしては、そのネットワークの重要な結節点としての役割を果たした「日本書店」——日本語の書籍雑誌を主に商っていた書店を本論ではこう呼ぶこととする——の活動を追跡することによってそれにせまる。日本書店関連の資料は、第二次大戦下の強制収容を経ていることもあり、多くが失われていると考えられる。本論では残された日米双方の資料、関係者の回想などに加え、邦字新聞に掲載された広告を分析の対象として利用し、その実態を再構成するべく試みる。

## 1. 移民地と日本語空間

20世紀前半の北米日系移民コミュニティにおいて、日本語で書かれた書物、新聞、雑誌は、どのようなものがどの程度流通していたのだろうか。そうしたさまざま媒体が広がり、読まれる空間をここでは仮に「日本語空間」と呼ぶ。その全体像をまずは粗描しておこう。

### 1.1 日本語新聞

移民たちにもっとも身近だった母語媒体が、移民地の日本語新聞である。これについては別稿があり、先行研究も比較的手厚いため、簡略に述べる<sup>1)</sup>。この種の新聞の歴史は、政論紙に始まる。自由民権期（19世紀末）に、日本政府の弾圧を逃れた人々がサンフランシスコなどで新聞を発行し、日本へ送っていた。代表的な新聞としては『東雲雑誌』『新日本』『第十九世紀』などがある。その後政論紙は衰退し、1890年代からコミュニティー紙が現れはじめる。サンフランシスコの『新世界』『日米』、ロサンゼルス『羅府新報』、シアトルの『大北日報』『旭新聞』などがあつたほか、ユタ、サクラメント、デンバーなど、比較的小規模の都市においても刊行されていた。

このように在米日本人コミュニティにおいて日本語新聞が発達した理由は、日本人移民の階層構成、経済的余裕、母国における新聞の発達の度合い、比較的離散していたという居住の形態、故国の情報への飢え、新聞の廉価さ、広告がとりやすかったこと、英語での情報へのアクセスが難しかったことなど複合的な理由が指摘されている。

### 1.2 日本語雑誌

新聞だけではなく雑誌も刊行された。いずれも長くは続かなかったが、初期から見ても、『臆はずし』『桑港乃菜』『宇宙』『太平楽』、また文学系の雑誌としても『レモン帖』『マゲ

ナ』などがあり、そのほか南カリフォルニア大学、カリフォルニア大学バークレー校の日本人学生たちが刊行した『南加学窓』『麦嶺学窓』なども存在する。第二次大戦下の強制収容所においてさえ、新聞や雑誌が刊行されていた<sup>2)</sup>。

### 1.3 書籍の出版

移民地では図書の出版も比較的早くから行われていた。1900年の記事「在留日本人と出版物」(『新世界』1900年5月9日)は次のようにいう。

堂々たる名前の会社がダウンサラーで恐ろしい名前の商店の間口が一間半で日本人間で日米〇〇社とも云はるゝものが光つて居るものは入口の招牌<sup>(計)</sup>計りであると云ふのであるから在留日本人の出版物がコックブックや労働の間に合せの誤謬だらけの会話篇のみであるのを見ても驚くには足らない […]

批判的な記事ではあるが、むしろこの時期からすでに出版活動があり、かつその貧弱さに批判が出るほどに需要があったことは驚きだろう。サンフランシスコの書店青木大成堂は出版業もかねており、たとえば1910年には『西洋料理法大全』『改正 加州読本独案内』(第一, 第二, 第三)『実用秘訣 アントレイ料理法』『加州案内地図 (和英字入)』『二十世紀 英和書文大成』などの書籍を出していたことが、『日米年鑑』(日米新聞社, 1910年12月)からわかる。料理本, 土地案内, 英語参考書などの実用書, 米国の教科書の参考書など, 需要が高かったジャンルを中心に刊行しているようだ。

1940年までを総体として見渡した場合、移民地における出版はより多彩なおもむきを現す。表1は『在米日本人史』(在米日本人会, 1940年12月)543-551頁をもとに作成した北米の日系人による著述刊行書籍の分類一覧表である。

総刊行点数は370点。むろん、母国日本の状況とは比べるべくもないが、のちに見るように、

表1 北米日系人著述刊行書籍分類一覧表

種別 \ 年代	～1899	1900～	1910～	1920～	1930～	1940年	不明	合計
史蹟及び発展史	0	2	5	13	11	1	0	32
在米日本事情	0	7	7	12	2	0	2	30
日米関係諸問題	0	2	3	12	2	0	0	19
米事情	0	8	10	9	1	0	1	29
米諸法律	1	2	1	5	1	0	0	10
教科書及び教育関係	0	10	3	5	4	0	0	22
論説及び随筆	0	3	8	16	7	0	0	34
宗教及び宗教関係	0	1	16	17	12	0	3	49
農業及び商業関係	0	3	4	8	3	0	1	19
文芸関係	3	0	8	29	12	1	0	53
旅行記、写真帖、辞典	0	2	4	8	7	0	0	21
伝記、其他人物関係	0	1	3	9	4	0	0	17
その他	1	6	10	12	6	0	0	35
合計	5	47	82	155	72	2	7	370

太平洋をはさんで膨大な量の図書が流入していたことを考えれば、なおその上にこれだけの本たちを移民地で出す必要と欲求があったということだろう。年代別に見れば、刊行点数は1920年代をほぼピークに山形の曲線を描いており、1924年の新移民法施行による移民禁止措置が、ここにも影を落としているとみることもできそうだ。種別としては、宗教、文芸が合計50点前後と高くなっていることも目に付く。

なお、出版の方法について一言しておけば、発行は米国であるものの、印刷は日本で行うことも少なくなかった。船賃を含めても、その方が安く上がったということだろう。雑誌『太平楽』（太平楽）は「在米同胞唯一の機関」を謳う月刊誌だったにもかかわらず、「二月号は／本月十五日入港／「マンチュリア」号にて着荷す」とあり、日本で印刷されていたらしい（『日米』1915年2月14日。／は原文改行、以下同。雑誌現物は未見）。米国で発行されたさまざまな日本語書籍の奥付を見てきた私自身の印象を言っても、印刷は日本、発行は米国という例が相当多い。

#### 1.4 北米移民地の「国内刊行物」

移民地で流通していた新聞・雑誌は、実は移民地で刊行されていたものだけではない。これまでの研究では、移民が主体となって刊行した出版物のみに注意が払われてきたが、移民地の邦字新聞を別にすれば彼らが眼にしていた出版物の大半は、実は「（日本）国内刊行物」だったと考えられる。国内の新聞の取次については前稿でサンフランシスコの書店、五車堂の広告をもとに考察しているが（注1）、その後日米新聞社が同様の取次サービスを行っていたこともわかった。「日本の三大新聞／大坂朝日新聞／東京朝日新聞／国民新聞／取次所 日米社営業部」という広告が出されている（『日米』1915年1月5日）。おそらく自社の配布網をつかって顧客に届けていたものと思われる。なお『日米』1915年6月14日の広告によれば、日米社は書籍の取次販売もしていたようである。

雑誌についても検討してみよう。図1は五車堂の1912年の広告、図2はサクラメントにあったよろづ商店の広告で、いずれも「定期刊行雑誌」の取扱一覧である。『太陽』『中央公論』といった総合誌にはじまり、実業雑誌、青年誌、婦人誌、滑稽誌、少年誌、宗教、語学、運動、娯楽と、バラエティに豊かな雑誌が並んでいる。このリストは、読者たちの需要に応えるべく考えられているだろうから、これによりこの時期の北米移民地の読者層の推定がある程度可能になる。従来理解では、1910年代初頭の移民地においては、まだまだ出稼ぎにきた若い独身男性の割合が多かった時代と理解されている。労働移民の割合が高かったのはそのとおりであろうが、このリストをみる限り、相当高度なリテラシーをもった読書人口が存在したはずである。

たとえば文学系の雑誌を見てみよう。ざっとリストを見渡してみるに、1912-3年に『文芸倶楽部』『新小説』『文章世界』『新潮』が手に入り、『太陽』『中央公論』の文芸欄を見ることができ、少し小ぶりな『早稲田文学』『帝国文学』『三田文学』『白樺』『青鞥』『スバル』『秀才文壇』『ホト、ギス』『秀才文壇』を購入でき、相当にマニアックな『ザンボア』『とりで』『女子文壇』をも手に取る可能性がありうるならば、これはその気になればほぼすべての——東京を中心にしたという制約があるが——同時代の文芸誌を集めることができたことを意味する。この状況は日本国内における地方都市の書店の取扱品目をおそらくは上回っていた。



もう一つ注意したいのは、取り扱われていた雑誌は、1910年代初頭においてすでに独身の若い男性向けの雑誌だけには限らなかったという点である。『婦人画報』『女学世界』などをそろえた「婦人の部」「女子之部」もあれば、少年少女向けの雑誌も複数、リスト化されている。

部数に関していえば、1904年において次のような記録が残っている。「書籍店は純粹なる書肆三軒其他小間物類、雜貨店等にて副業とせるもの多し、桑港市内書店に於て一ヶ月太陽の取次高八百部内外、文芸倶楽部五百部内外、新小説三百部内外なりと云ふ。」（『日米年鑑』日米新聞社、1905年1月）。『太陽』800部というのは相当な部数といってよい。

図書に目を転じよう。図3は、サンフランシスコの青木大成堂の「発売図書目録」である。実に100頁を超えるこの目録には、雑誌、歴史、地理、辞典、小説、講談本などに分類されながら、膨大な量の書籍がリスト化されており、しかもそのすべてが在庫品だという。品揃えも、定番の基本書籍から新刊書まで幅広くそろえられている。移民地の「国内刊行物」の厚みを物語る資料である。

## 2. 日本書店論

### 2.1 日本書店小史

米国に存在した日本書店に関する回顧的な記述は早い時期からみられる。『日米』の第2000号記念号は「明治三十二年四月と今日との相違を記すれば書籍店は僅か一戸（芙蓉堂）なりしもの今日に於て五戸（其他副業とするものは多し）」（桑港生「日米自第壹号至第貳千号期間の同胞発達概観」（1905年7月4日、27面）と振り返る。これまでのところ最も包括的な記述は『在米日本人史』（285頁）のそれである。

日本人が米国で貸本屋を始めたのは一八九二年（明治二十五年）の頃桑港に三遊楽亭といふのが出来た、これは甲州人竹川藤太郎の経営で、当時は本国より新刊書を取寄せて売捌く程の実力もなく、二三十冊の古本を賃貸し、一週間五仙の料金を取つてゐた。次で三友社が起り、一八九五年（明治二十八年）桑港ゼシー街に水藤某貸本店が始めて日本から雑誌を二三種を輸入した。

書籍店として稍体裁を備へたものは、一八九九年（明治三十三年）愛媛県人青木道嗣〔青木大成堂〕が桑港デユポンド街で開業したのを書籍商の最初とする。次で一九〇二年（明治三十五年）新潟県人小林与太郎〔小林中央堂〕がデユポンド街に書籍店を開き、これより日の本商店、五車堂が起り今日の盛況を呈するに至り、羅府では佐藤良吉〔佐藤書店〕が、一九〇二年に開業してゐる。（〔 〕内は日比による補注）

この記述でおおよその流れはわかるものの、間違いも多い。以下、判明しているものについては適宜修正を加えながら増補を試みたい。

まず、簡単に業態の変遷を整理しておこう。サンフランシスコにおける日本書店の歴史は貸本屋から始まったと言われるが、実はほぼ同時期に国内品の輸入商による兼業の書店が発展を始めているようである。図4～6が貸本屋の広告、図7～9が初期の兼業書店（商店）の広告である。兼業書店とは、本論文では日本国内から輸入した食品、雑貨、土産物などを扱ってい

た商店が、小説本や雑誌も置いたという形態をいう。歴史的にはこの次に専門の書店が登場する。「書肆業者の最も古きは芙蓉堂にしてステベンソン街に開業せり〔。〕尤も書籍の販売たる雑貨食料商の副業なりしを以て日本書肆の売行きありしは余程古きことなりとす、而し本業を専門として営業するに至りしは爰処二三年の中なり、現在数三軒」（『日米年鑑』日米新聞社、1906年1月）。ただし、兼業の形態は、専門書店登場後も地方の商店を中心に長く続いたと考えられる。専門書店として私がかもっとも早く確認している書店は、1900年にサンフランシスコのステイーヴンソン街にできた芙蓉堂である<sup>3)</sup>。この後、サンフランシスコでは、青木書店、小林中央堂、日の本商会、五車堂と次々に書店が開業していく。図10～13はこれら専門書店の広告、図15～22は外観および店内の写真である。

これらの書店をどのような人物が経営していたのか、詳細は分からないことが多いが、判明しているものをあげれば次のようになる。

▼小説貸本

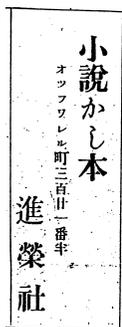


図4 進栄社  
（『桑港新報』  
1893年  
6月16日）

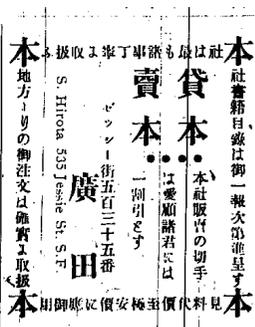


図5 広田  
（『新世界』1899年  
10月28日）



図6 「新聞雑誌縦覧所」増田徳次郎  
（『日米』1905年5月22日）

▼古書店

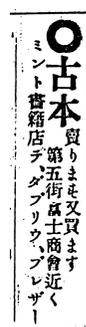


図14 ミント  
書籍店  
（『日米』  
1905年  
7月11日）

▼兼業書店



図7 富士合資会社、石版印刷 赤坂  
（『桑港時事』1895年5月12日）

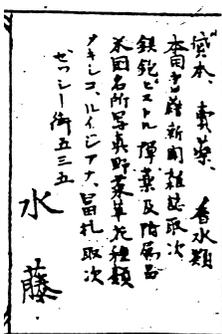


図8 水藤  
（『桑港時事』1895年  
5月12日）

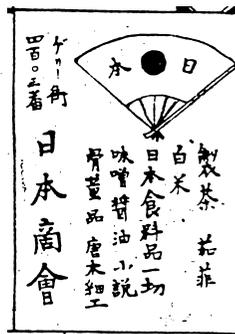


図9 日本商会  
（『桑港時事』1895年  
5月12日）





図19 文明堂 (同前)



図20 小林中央堂 (同前)



図21 有富書林 (同前)

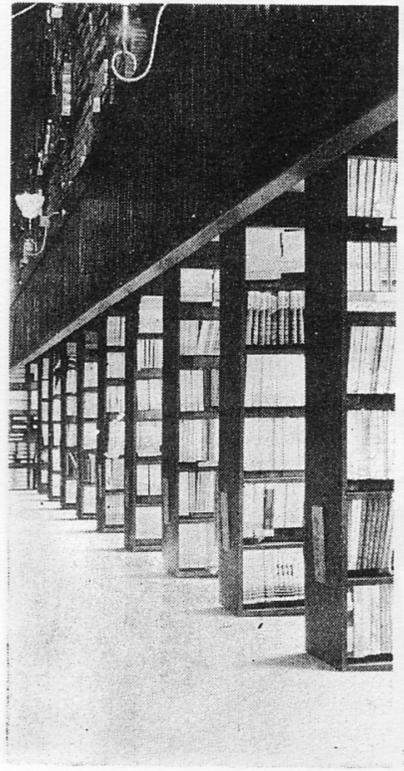


図22 よろづ商店の書棚  
(望月政治『わが国出版物輸出の歴史』  
日本出版貿易1971年4月)

青木道嗣君／青木大成堂主人

[...] 主人姓は青木、名を道嗣と云ふ、愛媛県温泉郡久米村の産、明治三十一年發憤する所あり、妻子を措きて米国に來り、シヤトル、ポートランド間に居ること数年、終に故国より妻子を呼び寄せ、桑港に來り、デユポント街に書肆を開業す、当時桑港に日本の雑誌著述類を取次、販売するの店、中央堂あり、芙蓉堂あり、然れども皆微々として振はず、一例を挙げて当時の事情を説明すれば彼の雑誌『太陽』の如き、中央堂に二十五部乃至三十部着荷するに過ぎざる為め、着荷毎に隣近の人相争ふて之を求め二三日後れば購読する能はずと云ふ有様なりき、故に青木君が大成堂を起して盛んに新刊物を取次ぎたるは頗る時宜に投じたるものと謂ふ可し。震災後君、衆に先じてパイン街に開店したりしが、顧客潮の如く來りて狭きを感じるの余、一年ならずしてゲリー街に移転す、今現に桑港の博文館と称せられつゝあり、創業七年祝ひの為め店友名簿を作り景物を添ゆる等、商売に抜目なきこと敬々服々の外なし、店頭裝飾する所の新刊見本、金光燦爛として目を奪ふ、真に是れ日本人ストアの白眉也。

別に常磐商会あり、亦た君の經營する所に係る、主としてカラー、ネクタイ等の裝飾品を鬻ぎ、又た東部某会社の代理として洋服の注文に應ず。

〔…〕一昨年雑誌『宇宙』を発行し、文学、宗教〔、〕政治、法律、経済其他社会万般の事を論導するの機関に供し、殊に加州日本人の発展策に付ては、巨資を投じて故国名士の卓説を買ひ、毎号之を掲載す〔…〕

君の出版せる書目には山田嘉吉氏の料理法大全、齋藤修一郎氏の懐旧談等あり、共に広く世に行はる。後進の士益する所甚だ多し。<sup>4)</sup>

のちに再論するよろづ商店の望月政治は1906年に渡米し、その後日本へ戻って太平洋岸の諸書店の共同仕入れの道を開いた人物。五車堂の小野昇六は1904年の渡米、五車堂の本店は「神田区小川町三四」の五車堂だった（『新世界』1906年10月10日）。このほか判明しているサンフランシスコの書店店主を名前だけ挙げれば、小林中央堂の小林与太郎、日の本商会の宮田乙吉と柴田常次郎、扶桑堂の山田佳太郎と古田良吉、文明堂の木庭利器三と須藤和四郎、有富書林の有富成五郎、青木大成堂には先の青木道嗣に加え支配人として星野辰次郎がいた（いずれも『宇宙』1908年1月による）。

カリフォルニア州の各都市における書店の分布、および数の変遷はどうだったろうか。表2は『日米年鑑』が整理した州内の各都市・地方における日本人商店の種別を利用し、そこから書店を抽出して作成したものである。サンフランシスコ、ロサンゼルスといった日本人の大きなコミュニティがあった大都市を別格とすれば、1907-8年ごろより、それよりやや小さな都市に書店ができてはじめていることがわかる。ただし、在米の日本人移民人口そのものは増え続けるにもかかわらず、書店の数はこの後増えていくことはなく、むしろサンフランシスコ、ロサンゼルスなどでは漸減するようすもうかがえる。母数が少なく、また依拠した資料の刊行総年数が短いため確定的なことはいえないが、どうやら1910年のあたりに、日本書店の数の一つのピークがあったようだ。この理由は定かではないが、現時点では、1907年の紳士協約以後、比

表2 カリフォルニア州日本書店分布表

	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915
サンフランシスコ	3(4)*1	3(5)*1	7	8	8	8	7	6	7	6	3
オークランド市					4	4	2	2	1	3	3
アラメダ市							1				
サンノゼ市、サンタクララ郡			2[*2]	3[*3]	1	1	1	2	2	2	2
ソラノ郡、ナバ郡								1			
サクラメント市			(1)*1	1		1	1	2	2	2	2
スタクトン市				1	1	1	1	2	2	2	2
フレズノ市				2	1	1	1	2	1	2	3
フレズノ郡				1							
ロサンゼルス市	5(3)*1	5(3)*1	5	5	5	7	5	5	4	6	5
サンディエゴ市					1	1	1	1			
リバーサイド郡				2	1	1					
ベンチュラ郡							1				
合計*4	8(7)	8	15	20	22	25	21	23	19	23	20
カリフォルニア州全体*5					22	25	22	21	19	23	20
米国全体*5								24			

◆書店数は『日米年鑑』（日米新聞社）によった。表示年は刊行年。したがって数字は前年の書店数となる。

◆書籍の販売を主たる商売としている店を数えていると考えられるが、兼業の比率についての判断は曖昧であると思われる。

◆年度、地域により担当者が異なるため、判断に揺れがある。

[\*1] ( )内の数字は1908年版による訂正 [\*2] 兼売薬 [\*3] 兼雑貨 [\*4] 日比による単純集計 [\*5] 年鑑の表示軒数

較的リテラシーの高い移民層が増加し、それを見こんで書店の開業ラッシュが起こったものの、需要とのバランスを失っていたため経営的体力と才覚のない書店から順に撤退していったものと推測している。

また、『日米年鑑』には巻末に住所録が掲載されており、これをもとにサンフランシスコの書店の位置を再構成すると興味深いことがわかる。1909年の同年鑑には以下の書店が掲載されている。

青木大 <sup>(成)</sup> 盛堂	1601 Geary St. (★1)
五車堂	1625 Geary St. (★2)
扶桑堂	1509 Geary St. (★3)
日の本商会	1517 Geary St. (★4)
文明堂	1750 Sutter St. (★5)
杉山有富商会	956 Stockton St. (★6)
明治堂	1623 Buchanan St. (★7)
万文堂	1509 1/2 Geary St. (★8)

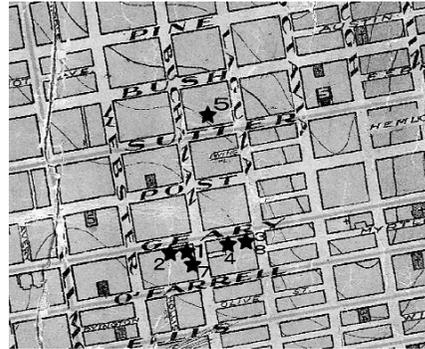


図23 1915年のサンフランシスコ日本人街近辺

これを地図上に置くと図23のようになる。

一見して密集しているのがわかる。1906年のサンフランシスコ大地震のあと移転した日本人町では、ゲリーとブキャナンが交差するあたりに実に6軒もの書店が集まっていたことになる。『日米年鑑』(1910年12月)によれば、1909年の日本人人口は、カリフォルニア州全体で55,901人、サンフランシスコで8,746人(含子供621人)である。ほとんど書店街のような活況を呈していたであろう一角は、移民たちの読書熱を物語っているかのようだ。ただしさすがにこの配置は密集がすぎたようで、いくつかの書店はこの後チャイナタウンの方へ移転している(『日米年鑑』1914年1月)。

さて、書店史に話を戻せば、専門書店のうち体力のあるものは、事業の多角化に乗り出す。青木大成堂、五車堂、よろづ商店などが代表的である。さきの引用にあったように青木大成堂の青木道嗣は常磐商会という「カラー、ネクタイ等の装飾品を鬻ぎ、又た東部某会社の代理として洋服の注文に応」じていたし、前掲の「発売図書目録」にも巻末に文具と薬がリストアップされていた。五車堂の広告(『日米年鑑』1909年1月)にも書籍部の他に、売薬部、文房具、貴金属部、洋服部、食料品部などが謳われている。

各書店は経営を合理化し、また同業者同士の協働をはかるため、組合などの組織づくりも進めたようである。1915年3月20日の『日米』には桑港日本人街書籍店組合の名が確認でき<sup>5)</sup>、『在米日本人史』(285頁)では次のようにまとめられている。「現在では米国雑誌書籍商組合を組織し全米同業者一致して営業してゐるが、同組合は一九一五年(大正四年)組織され、一九三〇年(昭和五年)全沿岸書籍商を網羅して、鞏固なる組織となし、支部を東京に置き大日本輸出商組合に加盟した。東京支部は米国向け書籍、雑誌の元締となり、輸出を管理統一し、文化報国を目的として活躍してゐる」。

これらすべての書店たちの歴史と努力は、第二次大戦下で執行された日系移民の強制収容で、

いったん烏有に帰すことになる。ただし日本書店という“特殊事情”のおかげで、戦後の再出発は比較的早く行われた場合もあったらしい。たとえば五車堂の書籍は、戦争後に戻ってみればすべて棚の中にあったという（Shirley Onoから日比への私信による）。無人となった店に、商品がそのまま残っているのは希有なことのようにも思われるが、この場合はそうでもないだろう。書物は、書かれているその言語が理解できない者にとって、ほとんど無価値だからである。

## 2.2 取次

ここからは、本の流通システムに関する面で現在判明しているところを整理してみたい。先にもふれたように、1915年に米国雑誌書籍商組合が組織されていたが（『在米日本人史』285頁）、『日本出版販売史』（講談社、1964年1月、125頁）によれば、よろづ商店の望月政治は「明治三十九年に渡米して、日本人農家を相手に書籍雑貨を扱っていたよろづ商店に入り〔…〕大正七〔1918〕年同業者の要望により共同仕入れの業務をひらくため、店を後輩にゆずって東京に帰ってきました。はじめはよろづ商店東京出張所として、書籍雑貨の対米輸出に乗出し、のち横浜商事株式会社と改称して昭和十七年までつづけてきました。昭和十六年に取次が統合されて「日配」ができたので、出版物輸出業者も十九社が統合して十七年に日本出版貿易株式会社となり、望月はその社長に推されました」。

つまり整理すれば、1915年に米国雑誌書籍商組合が設立され、1918年に共同仕入れのため望月が帰国。よろづ商店の東京出張所の位置づけで取次を行っていたのが、おそらくは規模の拡大のため、横浜商事株式会社と改称する。その後日配の誕生にともない、1942年に日本貿易出版株式会社となった。これが組織だった面での取次の概略である。

こうした組合や取次会社ができる以前には、各書店が各々直接取次のルートを開拓して商売を行っていたようだ。1895年の富士合資会社の広告（『新世界』1900年5月1日）には「博文館に特約致候間続々御購求を乞ふ」とあり、『太陽』『文芸倶楽部』の雑誌名が見える。また小林中央堂の広告（『日米』1905年7月4日、図13）では、「弊店は著名の書肆博文館、春陽堂、高山堂、金港堂、富山房、共益社、内外出版会社、警醒社、民友社、田沼書店等出版の書類、雑誌等を取次販売す」とされている。

また面白いところでは、シアトルの大正堂にまつわる次のような回想も残っている。

扱っていたのは、キング、講談倶楽部、改造、主婦之友、婦人公論などの雑誌、朝日、東京日日、読売の各新聞、各種新刊書をならべた。在庫十万冊とっていたから、今日のシアトルでは考えられないような書店であった。私の姉が横浜の移民宿といわれた讃岐屋旅館を経営していた。この姉の協力で書籍は、渡航者の携行荷物として、竹行李につめてシアトルへ陸揚げした。つまり運賃なしで輸入したわけだ。多い時には、数十個が陸揚げされた。<sup>6)</sup>

サンフランシスコの五車堂は当初東京神田に本店があった（『新世界』1906年10月10日の開業広告）。各書店は、知人や親類などの伝手をたよりに出発しつつ、次第に仕入れ網を広げていったのだろう。

以上は日本から北米へという書物の流通だったが、逆向きの流れもあったことを指摘しておきたい。海老名弾正が主筆をつとめた『新人』には、文明堂の広告が載っている<sup>7)</sup>。掲載期間は短くわずかに1908年11月から翌年9月までだが、「弊店は英語にて発行せられたる一切の英書類を取次販売致します」「弊社販売の新刊書籍は未だ日本国の市場に於て売買せられざる物にして而も当米国にて月々新刊書の数百部の中より撰択するのでありますから二三年後には母国にて歓迎謳歌せらるゝ書籍なる故購読者は必ず優先の新智識が獲られます」(同誌1909年7月)と、情報の早さを謳っている。広告の量は月によってばらつきがあるが、多い回には3頁ほどの英書のリストが付されている。海老名はこの直前にサンフランシスコを訪問しており、そこでつながりができたものだろう。同様の例では、大正年間に五車堂が神田に支店を置き、米国からの輸入雑貨を扱って成功している。興味深い例であるが、これについては同書店に関する準備中の別稿で考察することとしたい。

日米間の流通だけではなく、米国内の書店同士のネットワークもあった。青木大成堂が刊行していた月刊誌『宇宙』は、サンフランシスコでは小林中央堂、小野五車堂をはじめとする5書店(6店舗)、オークランドの4書店、ロサンゼルス<sup>8)</sup>の4書店、英領ヴァンクーバー1書店、ニューヨーク1書店など、米国内および英領カナダの計39カ所で発売されていたようである(同誌1908年1月「宇宙雑誌大売捌所」による)。

### 2.3 販売

販売面に目を転じよう。当然、各書店は店舗をかまえているので、そこでの店頭販売がある。その具体的なありさまは写真などから想像するほかないが、巨大な書棚がそびえ立つなかに、天井まで本が積み上がっている写真が残されている。店内には雑貨や薬品、絵はがき、文具なども並び、入り口のウィンドウには新着の雑誌、書籍のチラシが釣られたり貼り出されたりしていたことだろう。

また、北米の日本書店の売り上げの少なからぬ部分を担っていたと考えられるのが、通信販売である。『新世界』や『日米』などの新聞を縦覧していくと、各書店がその時々の新刊書や新着雑誌の広告を紹介付きでしばしば掲げている。それだけではなく、積極的な書店は、通信販売用のカタログを定期刊行していた。ロサンゼルス<sup>9)</sup>の書店博文堂もその一つである。「従来弊店新報は専ら新刊書籍の内容を紹介するに努めしが〔、〕本月号より紙面を拡張し<sup>あらゆる</sup>所有出来事を掲載しあれば〔、〕国家多事の折柄見るべきもの亦少からず〔。〕其の他都々逸一口啣お袋様とお母様おべそ嬢の人生観なぞに至りては〔、〕真に抱腹絶倒お臍の宿替へに値す〔。〕御入用の方は御一報次第無料進呈」(『新世界』1913年3月6日)。この『博文堂新報』はまだ発見できていないが、同様のものとして前掲した青木大成堂の「発売図書目録」があり、また五車堂も月刊で『五車堂商報』を出していたことが確認できている(『新世界』1912年12月10日)。

こうした通信販売の歴史は非常に古い。1899年の広田の広告(図5)にはすでに「本社書籍目録は御一報次第進呈す」「地方よりの御注文は確実に取扱」とある。日本人労働移民の多くは農業や漁業、林業、缶詰工場、鉄道の敷設管理などに従事し遠隔地に居住していたため、通信販売の需要があった。

▲一体アイダホの百性と云ふと馬鹿にする〔。〕百性の御蔭で日々の粥をすまて居る商人迄が馬鹿にする〔。〕先日ト或るアイダホの百が桑港の六街の井出とか云ふ雑貨店へ八百屋お七てふ小説を送て呉れと云ふたら〔,〕ヘイ品切ですから此れをと鳥追お松と云ふ本を送た〔。〕其れはイーが西洋料理法と云ふに日本料理法の様なのを送たり〔,〕又他の人が先年末頃同店で買物をした追手雑誌太陽を送て呉れと云ふたら〔,〕一月分を送るとか云ふて未だ送らない〔。〕先日も催促したら代価だけは取てあるからいーわとはあんまりでがんせんか〔。〕それとも来年の一月分を送るのですか（アイダホ百性）

（『投書籠』『新世界』1900年3月12日，4頁）

この手の方式に付きもののトラブルがさっそく起こっているところが面白い。なお、こうした地方の本好きたちは、「地方の製材所、鉄道のキャンプなどからシアトルに出てくると、まとめて三十ドル、四十ドルと買っていった」という（前掲「大正堂書店始末記」、375頁）。田村松魚『北米世俗観』（博文館、1909年12月）は、みずからが見聞したキャンプのようすを次のように描写する。「一般に無趣味な無人境の労働に就くものは、何時か読書の嗜好を持つて来るものである。で試みにキャンプ参観をして見ると、垢によごれた枕の下にはいろいろの小説、雑誌類、講談物と、それは実に無量雑多で、『我輩は猫』の傍には『岩見重太郎』があり、自然派の作物と重なつて精神修養論と云つたやうなものもあり、随分それは奇観である。そして互に作家評などを戦はしてゐる『書生キャンプ』なども屢々見受けるのである」（239頁）。

上の大正堂の回想には値段設定の話題も出ている。「値段は一冊一円のものを一ドルで、時には、同様に雑誌類を扱っていた古屋商店、三輪堂と相談して七掛けの七十セントで売った。大体、一ヶ月に日本円で九千円のが、九千ドル位になった。当時の為替相場はざっと一ドルが二円だから相当な利潤といえた」。競合する書店とどうやら価格協定を結んでいたらしい。具体的な値段の設定をあげれば、古い時期に商いをしていた富士合資会社が、『太陽』半年2弗（郵税込）、『文芸倶楽部』半年1.65弗（郵税込）という値段を付けており（『新世界』1900年6月13日の広告）、同月の『太陽』で確認すると、国内では一冊25銭、半年分で1円90銭、一年分で2円70銭と表示されており（いずれも郵税別）、大正堂のいう一円＝一ドルという相場は、ほぼこの時期から変わっていないようである。

## 2.4 書店を経ない流通

さて、書物の流通は書店を経ない形態もあった。ここでは、そのいくつかのパターンを見ておきたい。

書籍や雑誌は、日本の知人などから直接送ってもらうこともあった。「東の都に文学べる友より、異郷客愁のつれづれにもと、人にことよせて送りこせし『ふる郷』を讀みて、あはれの節多ければ、〔…〕」とおそらくは東京より送ってもらった田山花袋の作品について述べる文章が残っていたり（山本碧潭「落葉かご 田山花袋の『ふる郷』を讀みて」『新世界』1900年5月24日）、永井荷風も繰り返し知人に雑誌などを送るよう要請していたことが残された書簡からわかる<sup>8)</sup>。

また、移民同士で手持ちの書物を交換することもあった。「▲私は文芸倶楽部を讀みますが、

どなたか新小説か何かと毎月取りかえつこにしようと言ふお方はごぞんすまいか、お名前と住所を報せてくださつたら早速お送り申します（目せき笠）」（「投書籠」『新世界』1900年9月20日）。

興味深いところでは、1900年ごろのサンフランシスコで「日本人図書館」を設立しようという動きがあった<sup>9)</sup>。どの程度の規模で実現し、どれくらい存続したのか明らかではないが、書店が十分な規模を備える以前、母語で書物を読みたい、情報をえたいという欲求を満たすべく、互助的な組織が立ち上げられようとしていたらしい。時代はずっと下るが、戦時下の各キャンプにも、図書室があった。これについてはAndrew B. Wertheimerの博士論文、*Japanese American Community Libraries in America's Concentration Camps, 1942-1946.*, University of Wisconsin-Madison. (2004年) がある。

なお、書物の流通に関しては、このほかに古書店という重要な存在があるが（図14）<sup>10)</sup>、これについてはさらなる調査が必要である。また、地方を巡回して雑貨などを売るワゴンで書物も売られていたという回想も聞く。こうした移動販売の形態も考察の対象に入れていく必要があるだろう。

### 3. まとめ——文化の循環・創出の結節点としての日本書店

日本書店を中心として、日系移民たちが築き上げた日本語空間のようすを見てきたが、いくつかの知見を整理し、今後の課題・展望を指摘しつつまとめにかえたい。

まずは、「母語で読むこと」に対する移民たちの強い欲望に圧倒される。「先日或る書店へ一冊の本を注文した所が直に送つて来たは能けれども中を見ると紙のすき片や破れた所が往々有を見た実にムツとしたがセントパイをして遣ふと思たが小説にカツレテ居たから当度我慢して居るが今后何れ送る書も篤と点検して送らん事を偏へに願ふ訳である不注意も程がある（田舎老人）」（「投書籠」『新世界』1900年3月28日）。なじみ深い母語の文化から切り離されればそれだけで、その言葉で読み、話すことへの欲望は高まるだろう。新聞や雑誌、書籍を自前で出版していた移民たちの歴史はこれまでも指摘されてきたところだが、それに数十倍数百倍する「国内出版物」の流通があり、その膨大な蓄積があったことは、彼らの貪欲なまでの読書欲の力強さを物語る。日本書店の歴史とは、その欲望の歴史そのものである。

日本からの輸入雑誌の箇所ですら少し考察したが、書店の広告や通信販売用の目録からは、その購買者達の生活やリテラシーまでも透けて見える。新年を迎えれば暦や日記の広告が出、戦争が起これば戦争実記や画報の類が並ぶ。宿六を名乗る寄稿者は、書店の売れ筋商品と購買層の関係性を次のように非難めきつつ茶化している。「◎日之本商会の大阪滑稽新聞が何故に暴風雨の如き勢にて売れ行くか〔。〕大成堂の生々しき絵葉書や文明堂の日本直輸入美人葉書や中央堂や芙蓉堂の文芸倶楽部の無闇矢鱈に捌けるは何故ぞ〔。〕否な五車堂の意匠を凝らせし三美人のトレードマークが永当々々客を引く力あるは何故ぞ。／◎徴兵逃れ、一文無し、薄志弱行小生意気、真面目な勉強大嫌ひ、人三化七の酌婦に目の無き淫多羅書生のウヤウヤと徘徊するが為めならずして何ぞ」（「縋縋書生」『新世界』1908年2月8日）。独身者たちのコミュニティで、セクシャルな商品が売れることに何の不思議もないだろう。今後こうした目録を日本の同時期

のそれと突き合わせるなど詳細な分析を行えば、コミュニティの性格が新たに浮かび上がることも予想される。

移民たちの文化的活動との関連で言えば、書店が彼らの作った団体の拠点として機能していたことも見逃せない。以下はシアトルの三輪堂の例である。「そしてこの〔文学会の〕連中は暇さへあれば、当時ベースメントで十仙ベッドの夜番をしてゐた渡邊雨声のところへ集まるか或は三輪堂に集つて議論ばかりやつてゐた」<sup>11)</sup>。私がシアトルのパナマホテルのカフェでの展示で見た（2007年3月16日）三輪堂の写真では、店内に読書室のような机と椅子をならべた一室が設けられていたのが確認できた。おそらくそうしたスペースが、彼らのたまり場となっていたのだろう。前掲『続・北米百年桜』にも次のような記述がある。「前田袋村 岡山県出身。書店の三輪堂の番頭。穏健な歌人で、文学青年達はよく彼の店へ集まった」（101頁）。「私達が楽しみにしたのは、邦字新聞に掲載される文芸作品だった。私自身、詩作はしなかったが、三輪堂で文学青年達が話に花を咲かせる仲間に加わり、旭新聞や大北日報などへよく首をつっこんだものだ」（86頁）。書店には本好きが集まる。サンフランシスコの書店については、上のような回想はまだ目にしていないが、その書店の集中ぶりから見て、この区域が移民たちの文化的活動に活力を与えていたことはほぼ間違いなからう。

それにしても、異郷で本を読むとはどういうことだろうか。次の詩を読むとき、私はあらためてそうした問いに引き戻される。

#### 古本屋を歩く

俺は古本屋を歩く  
そして古雑誌や古書籍を購ふ  
其度にエキサイトする。

何故に？  
俺は知らない。  
然し寂しい移民地で——  
此の外国で——多くの同胞が  
酒や女に其本能の懊悩をいやす様に  
古本屋を歩く時の俺のエキサイトは  
俺をよろこばせ亦悲しませるのだ。

あゝそれ故に  
俺の願は寂しい。  
今日も昼飯をそこへにして  
古本屋を歩いて来た。

（全文。清水夏晨『詩歌集 永遠と無窮』私家版，1921年所収）

太平洋を越え、移民地の内外をつないだ多種多様な文物の流通は、移民たちのコミュニティを維持し、成長させていった血流そのものだ。それなしには、情報の共有も、新しい知見の獲得も、知識の蓄積も、それぞれの意見の発表も到底成り立たなかった。文学の問題にひきつけて言えば、絶え間ない新作・旧作の流入は移民地の文芸の創出の基盤となり、かつ雑種的な性質をもたらす条件ともなっていた。

その一方、驚くほどに分厚い日本語環境は、故国指向や思慕を保持する土台ともなったし、悪くすれば偏狭なナショナリズムの抱懐・強化など自閉的傾向さえ可能にしたとも言える。保坂帰一『吾輩の見たる亜米利加』（上巻、有文堂、1913年1月、215頁）には、次のような移民の姿が書き込まれている。

此の日本人は誠に妙な人間である。毎月々々十何冊と云ふ日本の雑誌を買つて来る。中央公論や太陽もあれば、文芸倶楽部、新小説もある。夫れを毎日日課のやうに、夜の一時頃迄読む。而して昼間二時間許り昼寝をする。友人も来なければ外出も減多には為ない。働いて来ては青い沈鬱な顔をして夜一時頃迄雑誌を読む。唯夫れ丈けである。毎日々々同じ事を繰り返して居る。月の中頃には此の雑誌も読み尽くして仕舞ふ。スルト詰らな相な顔をして何か<sup>う</sup>に誑かれた様に一方を見詰めて考へて居る事もある。

書物の奔流そのものには、意味は宿らない。それを読み、使うところから、文化が立ち上がる。書物を読み何かを作り出すものもあれば、書物を読み個人的な夢想の世界に耽るものもある。古本屋をめぐり、「俺をよろこばせ亦悲しませる」といった清水夏晨の詩は、こうした移民地における書物の両義性を歌っている。

北米の日本語環境は、移民たちのさまざまな指向に応え、その文化の多様な展開を支える豊かな土壌だった。日本書店はその重要で欠くべからざる<sup>ハブ</sup>結节点であった。

## 注

- 1) 日比「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」（『日本文学』2004年11月）。本論文と一部記述が重複することをおことわりする。先行研究としては、蛸原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（名著普及会、1980年10月）、前掲『米国初期の日本語新聞』、田村紀雄『アメリカの日本語新聞』（新潮社、1991年10月）、同『海外の日本語メディア——変わりゆく日本町と日系人——』（世界思想社、2008年2月）ほか参照。
- 2) 篠田左多江・山本岩夫『日系アメリカ文学雑誌研究』（不二出版、1998年12月）。
- 3) 面白いことに、広告によれば「上等貸間揚弓場あり」とあって、社交場・遊技場を併設していたことがわかる。なお、この広告の図版（図10）は天地逆だが、掲載紙のままである。
- 4) 金井重雄、伊藤晩松『北米之日本人』（金井通訳事務所 [サンフランシスコ]、1909年9月、179-180頁）。
- 5) パナマ太平洋博覧会を機に結成された「桑港発展協会」に名を連ねている。同組合の結成時期は今のところ不明である。
- 6) 「大正堂書店始末記」（伊藤一男『続・北米百年桜』北米百年桜実行委員会、シアトル、1972年4月）、375頁。
- 7) 『新人』の文明堂広告については、Emily Andersonから教唆をえた。記して感謝する。
- 8) たとえば巖谷季雄、木曜会宛書簡、1905年3月27日「〔生田〕葵山君——君の作所載の文芸是非送つ

## 北米日系移民と日本書店（日比）

て呉れたまへ。／〔巖谷〕小波先生——お送りの雑誌誠に有がたう。なお滞米中の永井荷風については日比「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か?」（『日本近代文学』2006年5月）を参照。

- 9) この図書館については『桑港之栞』第五編（1898年5月）第六編（1898年6月）に、岡田依三郎による発起文、寄付書目、賛成者の姓名などが掲載されている。
- 10) 沖田信悦『植民地時代の古本屋たち——樺太・朝鮮・台湾・満州・中華民国・空白の庶民史——』（寿郎社、2008年1月）。
- 11) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』（大北日報社、1927年7月）、引用は雄松堂出版による復刻版（上巻、1994年6月）、589頁による。

※本研究にあたり、文部科学省科学研究費助成金（若手研究B、平成18-20年度、課題番号18720043、研究課題「北米日系移民の日本語文学に関する総合的研究 1868-1945」）の助成をうけた。また研究をまとめる過程で、マイグレーション研究会（大阪商業大学、2005年10月1日）、The Annual Meeting of the Association for Asian Studies (San Francisco, April 6-9, 2006)、「改造社を中心とする20世紀日本のジャーナリズムと知的言説をめぐる総合的研究」研究会（慶應義塾大学、2006年6月17日）、連続講座「国民国家と多文化社会」第18シリーズ第3回（立命館大学、2007年7月6日）において報告を行い、貴重なご意見をえた。